

東亞醫學

字題長學郎次秀田水

目要號四十二第

投稿規定

讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

○名醫とその治療(一) 鹽田陳庵の卷 大塚 敬節

- 竹山氏に呈する第二報…………… 龍野 一雄
- 化膿性疾患の治療に就て…………… 龍野 一雄
- 漢方復興運動に於ける政治と學術……………
- 鍼灸規則の改正に就て…………… 龍野 一雄
- 漢方醫團團結を以て…………… 龍野 一雄
- 東亞文化顯彰…………… 永山 昇純
- 齒科領域に於ける漢方の應用…………… 中原富一郎

名醫とその治療(一)

鹽田陳庵の卷

大塚 敬節

鹽田陳庵の傳は殆んど知られてゐないが、その著陳庵醫話及び山田業廣が陳庵の業績として、溫知醫談に發表したるもの等に就て、陳庵の非凡な胸前を紹介してみよう。

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵の治術の進歩があつた。陳庵は必ずしも古人の説に拘泥しなかつた。陳庵醫話では、自分の説が古人の説と齟齬する所もあり、治療の工夫や病因を探る點などでは、自己の發明にかかるところが多い、何ぞ古人の迂説に拘泥する必要があらうぞといつて、妄に自ら實事につとめて、妄説を排した。筆者は數年前か陳庵醫話に説くところを病人の上で追試するに、そのいづれもが親試實驗に出た卓見であることを知つた。例へば承氣湯を與へ、日に三四帖宛三四日も服して大便不通の者は、強ひ與へてはならない。こんな場合には虚候があるから反つて溫劑に轉方すれば、胃腸の氣が和して下痢するといふが如きは、先達つて筆者自身も體驗したことであるがこれを更書きする治驗が溫知醫談に出てゐる。筆者は山田業廣である。その説に曰く余三十年前友人鹽田揚庵の父修三翁(陳庵は名を修三といひ、その子に文英といふ人のあることが、陳庵醫話に見えてゐる)が、この文英と揚庵とは同一人であるかと思ふ。附子理中湯を用ひて、一諸侯の便秘を治したることを傳聞したれども倉卒に聽過して、心にも留めざりしが、頃日前策を草するに臨んで、往時の事を思ひ出し、鹽田氏に其詳なることを聞かんと欲して、問ひ合せしに、書面をもつて贈りたれば、其文のまゝを此に載せて參商に供ふ。

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

陳庵は陳庵醫話を執筆した文政五年に五十六歳であつたといふから、生れたのは明和四年即ち皇紀二千四百二十七

年の當る。今年から數へると百八十四年前、即ち山縣大貳が死刑になつた年に生れた。陳庵と前後して生れた人に、淺井貞庵、華岡青洲、有持桂里、多紀藍溪、橋本宗吉、土生玄碩、畑金鶏、中川修亭、百々漢陰、高階積園等の諸家がある。

陳庵の學統に就ては、筆者は調査したことがないが、一黨一派に偏執することをきらひ、殊に吉益東洞の醫學に就ては、其說吾が先人に聞ける所に異なり、且つ吾意にも合はざるゆえ、其書を吾門内に入れずといひ、先人より承けた家學では、醫を業とするも

竹山氏に呈する第二報

漢方は漢方の爲に復興するに非ず いふ氏の意見其他

龍野一雄

「漢方醫術はその包蔵する本質的なるものが現在の支配的醫學たる現代醫學を歴史的に發展せしめるための推進力たる性格を有する故に復興の可能性がある」といふ竹山氏の言を分析すると、

一、漢方の本質。
二、現在の醫學は現代醫學が支配してゐる。
三、醫學の歴史的發展は現代醫學が主體となる。
四、漢方が復興するのは結局に於て現代醫學を發展せしめるが爲めである。換言すれば現代醫學が發展せんが爲めに功利的に漢方を踏臺にする。

五、漢方は現代醫學を發展せしめる推進力を持つてゐる。
六、漢方は漢方自身の爲に復興するのではない。
といふことになる。

第一の漢方の本質を論ずるに當つては漢方の臨牀的分析から出發してゆかねばならぬ。病理、診斷、藥理、治療等が如何なる過程に於てなされ、如何なるカテゴリーを通じて概念的に統一されるか、如何なる假定を要求してゐるか等を明かにしてからでなくては漢方の本質を云々することは出来ない。

私は昨夏の拓大講習で此目的を以て漢方は如何なる機構を有し、現代醫學と對比して如何なる差と特長があるかを講演したが、更に竹山氏の炯眼によつて漢方の臨牀的分析が行はれ我々の動向に強力な示唆と推進力を加へられんことを

待望する。いきなり本質などといふ文字が飛出して來ず、本質を規定するものを解明することこそ竹山氏に期待せしめて誰にか待つべきであらう。どうか「森先生自身では白覺してゐない所の森式辯證法的體療療法」などといふ語呂合せに止まらず、漢方一般に普通妥當なプリンシプルを提出して頂きたい。

第二及第三を前提としてゐながらその支配的且つ發展の主流たるべき現代醫學を併かも内科の臨牀といふ狭い局面に於てのみ批判し服せよと漢方に要求するのは矛盾してゐる。批判は出来るが克服は出来ない理由がある。竹山氏は臨牀批判のみを求め、明治の漢方がイデオロギーの故を以て滅びたことに對してはことさらに目を閉ぢてゐる。過去の漢方醫學即ちアジアの生産様式の下に醸成され、封建主義社會の下に育成されたものを、資本主義から合理的に統制社會へ向ひつゝある現在のイデオロギーの主流に合致せしめるには如何に再編成すればよいか、それが我々臨牀家の深い悩みである。現代醫學を批判克服して醫學だけが漢方化したのが他の諸文化形態は不動だといふ様な事は夢にさへ覺えない。基礎醫學も、外科的技術もそれ等を支持する科學一般をも否定し漢方的に變換せしめるやうな方法を持たずに批判克服が出来たらうか。少數の漢方醫家の經驗で

は量的なものにならない。又臨牀の優劣は個人差の多い臨牀技術によつて左右されそれを統計的に比較することは無謀で水掛論に終るのが關の山だ。氏によれば現代醫學が自身を發展させる目的によつて漢方を取上る。漢方は取上げられることによつて自分を膨脹させるといふ豫想の高政策である。それならば何れ漢方の側から現代醫學を批判克服するに及ばない

反つて現代醫學は自己の使命として漢方を批判克服すればよい。然る漢方がどさくさまぎれに膨脹するなどいふ方法は漢方の將來性を危くする。何故なら漢方が復興したとしても現代醫學を發展せしめる役割を果したら、それから先の漢方の運命はどうなるか。功利的な實用主義は他力本願的に便乗する限りには於て漢方人を奮起せしめる迫力はないのみならず、漢方の學的臨牀的に確固たる特質から出發し且つさう云ふ自覺を漢方人が持つてゐなければ空中樓閣に等しいものに終つてしまふ。竹山氏の提唱は畢竟樂屋落ちとはいへ樂屋内でも異論のあるものである。

私は西洋的科學文明がどんなに横行しやうとも東洋に於て東洋的なものゝ存在を抹殺することが出来ぬ。即ち普遍史が成立したとしても特殊を溶解せしめることは出来ないといふことに基いて立論してゐる。漢方は現代醫學に對して特殊の性格があればこそ獨立し得ると思つてゐるのだ。但し獨立ではなくあくまで現代醫學に對立したものである。竹山氏は「自己を西洋醫學の否定的契機として兩者の異質、逆説を高度に原理的に統一せんとする方向を採つてゐる」といふ愚見に對し「此思考方法は誤謬だ」と云つてをきながら直ぐ「その次に「現段階に於てはさう云ふ方向を探つてゐると思はれず、漸く採らんとする状態にまで到

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

達したに過ぎない」と愚見の内容を肯定してゐる。竟畢竹山氏は愚見を理想として代償成だが當面の問題としては何れも漢方の發展策を現代醫學との争闘によつて勇氣付けやうといふ一流の方法である。成程程の理想は十年や二十年で實現しやうとは思はない。けれども目標はそこにある。現在は凡てが過渡期で、我漢方もその目標をしっかりと見極めてをいて、そこに到達する過程として自己の特殊性を主張すべきなのだ。折衷が二つの對立的舊體制と新生體制と三者ともに有都無都に終らせること位は私も知つてゐる。一つの太い主流が對立物を統一することによつて自己を止揚し、更に大なる主流

(一)

(二)

化膿性疾患の治療について

龍野一雄

熱症を伴ふ化膿性疾患の治療は根本的には傷寒と同じだと云はれてゐるが全くその通りだ。初起熱には發熱劑を、進んで熱になるか初めから裏の部位に病を生ずれば攻下する。往來熱或は濕熱には柴胡、石膏、黃連等が行き、滯瘍後は乾して痰劑が行く。膿は傷寒の汗と同じに見ればよい。膿膿し難きは發汗し難きと同じく、稀膿は汗針で汗補漏れて止まらずと同じ方針で治療する。故に越婢湯や越婢加朮附湯などが用ひられるのである。越婢湯が風水に表水をさばく作用は漫腫して限局し難い膿を醸成させる。然し發汗後脈洪大煩渴に白虎加人參湯を使ふが、滯膿には石膏劑を使ふこと少く、本間梨軒が石膏を使ふと膿が薄くなり參湯を使ふと粘稠になると指摘してゐる

のは正しい觀察である。又肉色は舌候と同じ價值があるとも考へられてゐる。小林孤雲などは此點を強調して肉色白きは桂附子、紫は桃仁、黒きは抵當の行所であると云つてゐるが、勿論大概の見當たるに過ぎず、株守すると誤る。肉色白きは肉芽組織が弛緩性の場合で參湯の類で補ふ場合が多い。或は桂枝と附子でもよい。

舌候も紅は附子と定つてゐる譯ではなく反つて下劑が行くこともあり、黒いからとて下劑より附子が行く場合もある。だから他の症候と配合して判断しなければいけない。化膿性疾患では殊に局所を離れて見よといふことが必要である。假りに背離があるとするその局

所を一番後廻しにして診察する。自覺症、脈、舌、復診とやつて判定を下す。表證があるか、水毒があるか、實證が等々。それだけで證は擧げるものである。局所は以上の如くに擧げた證が妥當してゐるかどうかを再検討する意味で、發證の意味で觀察するがよい。虚寒證なら局所もやはり同じやうに、稀膿、貧血性、肉芽組織不良のことが普通である。

局所だけ見て能事了れりとするは無論よくないが、局所から出發して行くのも誤りの本である。所が局所の變化だけで未だ他の自覺症、脈などに變化が現はれないことがあつて、例へば極く軽い瘰癧とか、小さいフルンケルの如きが是である。その時には局所だけで處置すればよいのであつて、未だ全體的關係としての價值判斷を下す程度に及んでゐないと解釋すべきである。

何處かを怪我して切つたとするたゞ、それだけでは陰陽虛寒熱は未分の状態である。失血の量が或限を越して來るとか、化膿して發熱症を越した場合とかに始めて全體的に取扱はれる價值を生じて來るのである。

局所に於ける症候が最も顯著な時に治療の局所特殊化が行はれる。例へば背癰なら葛根湯、瘰癧なら大黃牡丹湯、膿瘻なら土瓜根散である。但し是等の療法は他に流用もされるし、従つて他の療法を用ふべき場合も亦有るのである。頂背強から何でもかでも葛根湯が括弧根だといふ譯には行かない。

だから局所の價值判斷の限界があるといふこと、局所を離れて全體的價值に移してみよと云ふことが起つて來る譯である。

東洞流では發表に葛根湯、葛根加桔梗、葛根加朮附湯を定式的に使ふ。(第八頁へ續く)

所を一番後廻しにして診察する。自覺症、脈、舌、復診とやつて判定を下す。表證があるか、水毒があるか、實證が等々。それだけで證は擧げるものである。局所は以上の如くに擧げた證が妥當してゐるかどうかを再検討する意味で、發證の意味で觀察するがよい。虚寒證なら局所もやはり同じやうに、稀膿、貧血性、肉芽組織不良のことが普通である。

局所だけ見て能事了れりとするは無論よくないが、局所から出發して行くのも誤りの本である。所が局所の變化だけで未だ他の自覺症、脈などに變化が現はれないことがあつて、例へば極く軽い瘰癧とか、小さいフルンケルの如きが是である。その時には局所だけで處置すればよいのであつて、未だ全體的關係としての價值判斷を下す程度に及んでゐないと解釋すべきである。

何處かを怪我して切つたとするたゞ、それだけでは陰陽虛寒熱は未分の状態である。失血の量が或限を越して來るとか、化膿して發熱症を越した場合とかに始めて全體的に取扱はれる價值を生じて來るのである。

局所に於ける症候が最も顯著な時に治療の局所特殊化が行はれる。例へば背癰なら葛根湯、瘰癧なら大黃牡丹湯、膿瘻なら土瓜根散である。但し是等の療法は他に流用もされるし、従つて他の療法を用ふべき場合も亦有るのである。頂背強から何でもかでも葛根湯が括弧根だといふ譯には行かない。

だから局所の價值判斷の限界があるといふこと、局所を離れて全體的價值に移してみよと云ふことが起つて來る譯である。

東洞流では發表に葛根湯、葛根加桔梗、葛根加朮附湯を定式的に使ふ。(第八頁へ續く)

漢方復興運動に於ける 政治と學術

—漢方醫家の役割の限界に就て—

竹山 晋一郎

(一)

漢方醫術復興運動に關して漢方醫家の爲し得る役割は、其の學術の領域に限定せられねばならぬ。それは、現代漢方醫術復興運動に主として關與してゐる人々の素質才能並に人格が、それを現實的に規定してゐるからである。

人間は、結局、その人の爲し得ることだけが出来るのであつて、爲し得ないことは出来ないものである。此の故に、人は、先づ、自己の素質、才能を正しく認識することを必要とする。臨牀家たる素質なくして醫者とつた者は、素質者となり、演劇的才能無くしてたゞ好きなが故等の理由から俳優となつても、その者は一生大根役者で終らねばならぬ。横綱たり得る者は、政治家に政治家の素質がある。素質なくして単に好悪や努力のみでは大成しない。素質があつて、それが努力によつて才能として展開されて、初めて一家を爲し得るのである。

人は、若くして、自己の素質の何たるかを自覺し、早くも自らの一生の進路を定め、その道を營々と歩む者のみが、一事業を爲し得るのである。その場合ですらも運命の神は幾多の試練を彼の上に試み、しばしば、その進路を阻む。それを飽く迄も突き抜けて行く意志も亦必要である。

個人の素質、才能は、社會の客觀的現實の情勢に、それが合致せぬ時は、折角の素質も才能も、さうばり役に立たぬ場合もある。時代が其の個人の素質、才能を必要とせぬ時は、それは正しく發揮せられる事を防がれて、寧ろ、其の社會に取つて餘計なもの、邪魔なものゝ如く取扱はれる場合すらある。人間は、時代が其の人を必要とする時よりも、餘りに早く生れても、餘りに遅く生れても不幸である。生れる時を間違ひて生れて來た天才の一生こそ悲劇である。勝海舟の父親小吉は、少しばかり時代より早く生れて來たために市井無賴の一御家人として厄介者扱ひをされ、一生を終り、子の海舟は時に遭遇して歴史的役割を爲し得たのである。しかも、素質的には海舟の父も亦海舟に劣つてゐたわけではない。時代に遭遇せずして、すねて自から身を破つてしまつたのである。

(二)

復興運動の或る時期に於て、滿洲事變以來の一種の反動的復古思想の擡頭に當り、反動家の或る者達が、漢方復興問題を自己の陣營内へ持ち込まんとして擬裝した好意を示しつゝ、近付いて來た事があつた。正直な漢方醫者は、その好意を擬裝されたものゝ氣付かず、百萬の味方を得たかの如く思ひ、又、野心的漢方醫者は、此の復古思想の反動性を見破る能力なくして、積極的に便乗せんとしたのである。

我々は、此の時、漢方醫家達の此等の傾向に對して、復興運動の進路を誤り、本來の目的を歪曲する危険あるものと感じ、復興運動を反動家や政治家氣取りの俗物的漢方醫家(自稱漢方家)の爲すまゝに放任すべきに非ずとして、復興運動から、思想的、政治的性質を一應分離して追放すべきことを緊急とし、現代漢方醫家の爲すべき任務を、臨牀家として漢方醫術を自身を術に於て十全に修得すべきにあり、而してこれを後世へ正しく發展的に傳へることを主張したのである。

然るに、現代に淺井國幹なきを嘆じた者はあつたが、一人の後藤浪山、一人の吉益東洞なきことを恨事とした者は一人もあつたのである。

淺井國幹の時代は、あまりにも政治的攻勢が強く、學術の領域内に於てのみでは既に守り切れず、同じく政治的に攻防の手段に出づるより方法がなかつたのであるが、幸にも國幹の如き人物があつて、縦横の奮闘をしたものゝ、刀折れ矢盡きしてしまつたのである。

現狀に於ては、寧ろ、後藤浪山を必要とし、吉益東洞の出現をこそ望むべきである。浪山も東洞も共に傳來醫術を日本化した醫術革命家であつて、彼等は決して政治的に其れを行つたのではなく、又行はんとしたものでなく(時代も亦其れを必要としなかつたが)遂行したのである。

漢方醫術は、現在、御用醫學たる近代洋醫學に對して舊時代の非科學的醫術として、醫界に於ても法制的にも、その立場を無視され、存在の理由を否認されてゐるのだ。しかも、漢方の内科臨牀醫術としては、近代洋醫學に優れたものを持つてゐるのである。その事を術に於て、實力に於て、社會に、國民に、醫界に認識せしめねばならぬことこそ、目下の急務であり、現代漢方醫家の爲すべき第一の條件である。

内容的には政治家としての素質も手腕もあるのではない。あるかの如く見えるだけである。故に、かゝる俗物的人間が、先頭に立つてその運動をリードする時、導かれる一群は、いつの間にか、道なき曠野へ迷ひ出してしまうことになる。

かつて、反動的復古家に乘ぜられんとした我國の漢方醫界は、現在に於て、俗物的人間によつて、再び利用せられんとしてゐる。漢方も鍼灸も、理論に於ても、臨牀實踐に於ても一人前としての修業すらなき自稱漢方家にして、たまたま、彼等が俗物であつたが故に政治家的行動に出たのであるが(實は、漢方醫としては名を爲し得ぬので、政治的行動に於て賣名するのだ)、彼等の旗の下に従ふ時、復興運動を迷路へ踏み入れることは必定である。

心ある漢方醫家諸先生よ。自己の素質と才能を知つて臨牀室へ立ち歸れ。そこに閉ぢ籠ることを希望する。而して、復興運動の對象を現在に於ては(將來は別だ)患者に求めよ。今は、病人を治すことだ。漢方醫術によつて病人を治すことだ。治された患者こそ、復興運動の百萬の味方である。

己れを知つて、己れに適した荷物を第一に取り上げることが得策である。しかも、一つの荷物を完全に持ち運びさへすれば、他の荷物は、第三者が頼まれぬのみに手傳つて目的地へ共に運んでくれることになる。いや、實は、三つの荷物(同一重量)の荷物が同じ重量(同一價值)の荷物は、案外に軽いもので、一番重い荷物の上に、邪魔にもならず乗せることが出来、一緒に運んで行けるかも知れない。

最大の、一番重い、一等價値のある荷物を運ぶことに全力を集中することが、三つの荷物を同時に運んでしまふことになるものである。第三者が手傳つてくれるか、或は自身の手で、案外易々と他の二つと共に。

漢方醫術の有する固有の方法論は、臨牀を通じて理論的に正しく會得し、それを臨牀に於て十全に生かすこと。それが、今一番大切のことである。而して、同時に歴史が使命として課してある近代洋醫學への批判を斷行して、我國の醫術を推進せしめることだ。漢方醫が漢方を知らずして、何んの漢方復興をや。(第八頁)

鍼灸規則の改正に就て

瀧田行彦

一層多難な年を迎へ國民保健の確立は益々重要を加へ、醫療制度の改革と共に鍼灸規則の改正も目睫の間に迫つて居る事と思ひます。従來此の問題を續くつて種々な案を擧げて各種の運動が爲されて参りました。その中でも強力なる運動には

一、鍼灸醫師法の制定を迫り、醫師と獨立した、これと對等の權利義務を獲得せんとする主張と、

一、單なる現行規則の一部の修正を以て一先づ満足せんとする主張とがありませぬ。

處で當局の意向はどうかであるかと云ふと、田舎醫生の時流に染く過ちなきを保し得ないが、獨立した鍼灸醫師と云ふ者は絶対に認められざるべきものである。此の方は残念ながら當分見込みは無いものと思はなければなりません。然らば如何なる方針であるかと云ふに、醫師法との關係をどうきめるかを根本問題として解決しようとして居るのではないかと思ひます。即ち

一、鍼灸を醫業の中へ入れる従つて醫師は自由に出来る。併し醫師でなくとも別にこの方の免許を受けた者はやる事が出来る、と斯る様な處にきまるのではないかと愚考して居ります。

前記の各運動にはそれらの理由論がある事と思ひますが、一は現在の鍼灸師の状態から考へて少し行き過ぎの様であるし、一は遠慮し過ぎて居る様に思はれます。これに就て私はその何れとも主張を異に致して居る様に思ひます。然るが故にこそ敢て私見を述べたい。ある同志の駁論を希望する者であります。

一、醫業の問題

先づ鍼灸を醫業の中へ取り入れる様主張する、これは鍼灸家年來の要求であるし、幸ひ當局もその様な意向であると思ひます。實現可能であると思ひます。併し醫師の權柄が豫想されませぬ。併し醫師が認めると否にかゝらず鍼灸師は醫業として居るのであるから、寧ろ認めて自分達も自由にやれる様にすれば損な取り引きではないと思ふ算盤を前に置いて交渉すべし、諒解を得られぬ事はなと思ひます。運動者は當局のみでなく、此の方への諒解運動にも主力を注ぐべきであらうと思ひます。次に學問的に認め難い問題があるが、これとて反對に學術的に否定するだけの理論も實際無いと思ひます。その感情論に過ぎないと思ひます。

一、年限の問題

中等學校又は青年學校卒業程度以上の學力を有する者たる事と主張する。

社會的地位の向上は何人も望む處であります。先決問題として素質の向上を擧げるべきであります。假りに鍼灸醫師法が實現したと致しましても、この素質が取り上げられ決定されない以上、斷じて地位の向上は望むべくもありません。これなくして如何に大聲血を吐くも鍼灸が如何に優秀な醫術であつても地位の向上は絶対に不可能であります。瘡癩や整骨師がこの要求を自ら出すに一人鍼灸師のみこの問題を取り上げようとするのであらうか、鍼灸師の尊嚴を侵し社會的認識を阻害する者は社會に非ず醫師に非ず、それは鍼灸師自身ではなかつたらうか。これが實現したとしても無資格者に與へた免許を剝奪する事はないと思ひます。この主張を當局へ反映させ改正規則には是非共此の一條を加へる様運動すべきであると思ひます。學術の高揚を圖つても人これに伴はぬ場合は、人は捨て去られ、學は他の者に取つて替はれるは必然であります。

一、年限の問題
修業年限は二ヶ年乃至三ヶ年とする事。
中卒四ヶ年では醫師と同様で、而かもそれ以下の資格より與へぬとすれば、矛盾する故に鍼灸師の修業年限はそれ以下で宜しいと思ひます。終生を研究に精進しても尙足りませんが受驗資格はこの位でよいと思ひます。出来なれば通らないのですから危険はないと思ひます。

二ヶ年位が適當ではないかと思ひます。

現狀から見れば、四ヶ年等とこんな難に力を入れるより寧ろ素質の方にこそ力を入れるべきであります。滿洲醫師試験も三ヶ年より要求して居りませぬ。假りに修業年限を十年と致しましても社會的認識は得難いと思ひます。それに引きかへ修業年限を一年と致しましても中卒の素質を要求すれば地位の向上は容易であります。

一、名譽の問題

鍼灸師とする事
鍼灸師でも鍼灸師でもない名稱の方は大いして問題でないと思ひます。醫業を爲す者故に鍼灸師は當然の名稱であります。只間違はなで頂きたい點は、從來も鍼灸師を主張して一蹴され居りますが、これは名稱に非ずして内容即ち權利、資格等を要求したものであります。即ち醫師と獨立して、而してこれと對等の資格を獲得せんとしたのであると思ひます。私は單なる名稱に止まるもので、かうした内容を要求して居るのではあります。即ち醫師は醫業全部を行ひ得る者、これに對して私の云ふ鍼灸師は醫業の一部即ち鍼灸のみ爲し得る者でありましてその範圍を限定せる意味を冠した迄であります。

鍼灸が醫師法による醫業と云ふ事になれば盲人には出来なくなるかも知れませぬ。私は按摩マツサージを盲人の專業とし、鍼灸からは總退陣して頂きたいと思ひます。

鍼灸師の社會的地位の向上を得んとするならば、先づ中卒程度の資格を要求する事と、盲人と分離するとの二つの問題を解決しなければなりません。これを行はずして今後幾十年社會に向ひ、將た學界に對し、その向上を叫ばうとも斷じて絶対に吾人の要求する様な時代は参りませぬ。警視廳に於ける鍼灸按摩を一九とする組合の結成等斷乎として反對すべきであつたと思ひます。

漢方醫師團結を横目で見る

多々野凡兒

○栗園先生、且て説いて曰く、一もう五十年もすれば、漢方は、再興するよ」と
紀元二千六百年
十二月二十二日、九段軍人會館で漢方醫師團の結成を期して會合が行はれた。

栗園先生の先見明かなりしや。或は法螺を吹きたたりとなすべきであらうか。

○會するもの二十餘名
日本に於て、現在、漢方の傳統を繼ぐ者、

百人以内、藥學者、藥劑師、篤志家、仙人、モグリ、誰でも彼でも、漢薬に理解あり、と自稱他稱する者を鳩合しても、恐らく千人を超へないであらう。

五萬の醫者中、皇漢醫學に關心を有する者、誠に寥々たるものである。○數を以て、質を推す事は、素より不可である。

然し、激變する世界狀勢、社會狀勢は、少數者の犠牲を顧る邊をすら與へない。
漢方醫家の存在もポーランド、エストニア、ラトビア、アルバニア等々の小國の運命の如く、亦危ア哉！
○第一の危機は、統制による、醫療制度の劃一化に際し、少數者たる漢方家の特殊性は、全然無視されるであらう事である。
多くの漢方家は、五萬の醫家の滔々たる西洋醫學萬能の潮流中にあつて、超然とし、毅然として、自ら信ずる所を行つて來た者である

(四)
好意を以て評すれば、誠に獨立自尊、惡意を以て評するか、無關心なる者に評せしむれば、涓狂孤介、或は、非常識漢と見做される當局者、或は、醫政家で、漢方家に同情を有する者果して何%あるであらう。況や、之を尊敬する者に於てをや。
○多數の醫政家、當局者は、漢方の何者たるかを知らず、一種の先入を以て、之に對處せんとしつゝ入る。
漢方家の多くは、自らを高しとして世評を一顧せず。來る者は拒まず、去る者は追はず。と嘯く。殼を閉して、魚店に露される、さゝの如くならなければ幸である。
○從來の漢方家の最大の缺點は、その消極的、引込み思案なる態度である。
西洋醫學の治し難しとする、奇症難症を治癒せしめながら、その學問的意義を考へ、之を學界に解説するの勞をとらなかつた。之には相當の理由もあり、事情もあつた。自由主義的社會に於ては、對外的な活動をしなかつても、所謂漢方愛好者を相當數患者に持てば、其の日の糧に困る事はなかつたであらう。
然し、今後の社會に於て、かゝる退嬰的な無氣力さは、許されるであらうか。之は、漢方の傳統に對しても一つの重大な罪惡である。何故なら、現存の漢方家の後繼者は絶無となり、數十年後には漢方は、全く、窒息して了ふであらうからである。
○漢方家が、打つて一丸となり、その存在を認識さすべく、大活動を開始する事は、今からでも、遅くはない。大いに期待すべきである。國亂れて忠臣現はる。今や、外患の爲に忠臣現はる。一擲して、大同團結すると云ふ事は、誠に喜ばしい。
(第八頁へ續く)

東亞醫學協會 一月例会會 (第十八回)

漢方醫學的診斷治療の過程

吾等が病人を診る。漢方醫學の診斷は望診、聞診、問診、切診(脈證、腹證)の四段階を経て、病機を全體的に把み、方證相對の藥方を處し綜合的治療をする。そこに一貫せる漢方醫學独自の體系がある。その診斷と治療の過程を明かにし、證の把握を懇切に述べんとする。類證鑑別から藥理質疑應答にまで及び、やがて漢方治療學を集大成し諸賢と共に斯學を強く前進せしめよう。

演題

一、頑固な皮膚病及び不治といはれる脊髄勞の治驗

幹事 多々良素氏

二、興味ある高血壓の數例

理事 矢數有道氏

三、難治とされた骨盤腹膜炎の治驗

理事 龍野一雄氏

四、注射や頓服では治せぬ特殊腹痛の數例に就て

理事 矢數有道氏

日時 昭和十六年一月廿五日(土)(午後六時)

開會(時間厳守)

場所 小石川區茗荷谷町卅二、拓殖大學 講堂
會場費三十錢也

東亞醫學協會

(第一頁より)

次に陳庵は長崎に遊學して吉雄耕牛の診治をうけたことがある。耕牛はオランダ流の外科をもつて盛名があり、前野蘭化や、杉田玄伯も此の人に教をうけたことがある。陳庵醫話から、その條を引用して、此の稿を終ることとする。予二十一歳より三十一歳まで兩脚腫瘡を患ふ。初は冬發し夏癒しに、後は四時瘡へす。百方驗なし。其大發の時、とりもちにて脚を包めば臭水出で癒る。一旦のことにて廿日ばかり過れば又發す。此時漫遊して崎陽に至り、其治方を吉雄幸作(耕牛と號す)に問ふ。幸作曰く、瀉血せば治せんと。予歸府の翌年夏、水蛭數百を集め、瘀血を取ること二次、一次に血三合餘、其冬十に七八を減す。又翌年夏血を水蛭にすはせること三次、其冬發せず、其後今年五十六歳に至るまで足脛の痒を覺えず、其後此術を數人に試みるに皆癒ゆ」とあつて陳庵は一家の識見を持ち乍らしかも一方に偏執せず、蘭方醫の説までも採用して、治術の上達にはげんだのである。(大塚生)

本誌代納入者芳名

- 金五圓也 山本仁之助氏
- 金三圓六拾錢也 森本 彰氏
- 金三圓四拾錢也 間中 喜雄氏
- 金三圓也 宮本守太郎氏
- 金二圓四十錢也 林 煥 德氏

金一圓二十錢也

本協會寄附者芳名

- 一圓書館用本棚一架 矢數 有道氏
- 一金拾圓也 清水藤太郎氏
- 一金拾圓也 高島堂藥局氏
- 一金五圓(會旗) 武藤 敏文氏
- 一金五圓(會旗) 林 煥 德氏
- 一圓書館用本棚一架 矢數 有道氏

- 前川勢津子氏
- 岡田 明祐氏
- 申 信 求氏
- 沖野與三郎氏
- 田尻 治男氏
- 池田 亨侃氏
- 高田 勝憲氏
- 高島 文義氏
- 細川喜代治氏
- 藤代 蕃山氏
- 王 宏 二氏
- 金 秀 屹氏
- 野田一之丞氏
- 久保秀次郎氏
- 沼田 岳二氏
- 戸部宗七郎氏
- 中川 清三氏
- 原 單 記氏
- 齋藤 清次氏
- 淺野 秀雄氏
- 橫澤 賢氏
- 渡邊 武氏
- 高橋眞太郎氏
- 宮尾 三郎氏
- 金子 正義氏
- 渡邊 道淑氏
- 金本 健一氏
- 坂本 菊枝氏
- 田宮孝之助氏
- 關川 清子氏
- 桂 七郎氏
- 森田 周一氏
- 若杉 浪雄氏
- 堀 友二郎氏
- 鳥田千代松氏
- 洪 鐘 煥氏
- 三浦 誠一氏
- 栗飯原宏一氏

借行學苑創立記念日
漢方圖書館開館記念

東亞醫學協會大講演會

本協會はこゝに創立六周年を迎ふるに當り、多年の懸案たる附屬漢方圖書館の設立を見、この記念すべき佳節に開館式を舉行し得るを喜ぶものである。拓大當局の深き理解の下に講堂内に一室を與へられ、書棚の數十架、全數千冊の整備が成つた。新東洋醫學發祥の地として、新進醫道の行者の一室より生れよ。協會はこの記念すべき日に謹みて醫祖神を祭り、先哲醫家慰靈祭を行ひ、開館式と共に記念大講演會を行ふ次第である。

祭 事

- 一、醫祖神祭
- 一、先哲醫家慰靈祭
- 一、漢方圖書館開館式

總 會

一、東亞醫學協會總會

- 矢數 有道 明氏
- 渡邊 素 武氏
- 柳 谷 素 靈氏
- 小 出 廣 壽氏
- 栗 原 廣 三氏
- 木 村 長 久氏
- 龍 野 一 雄氏
- 清 水 藤 郎氏
- 矢 數 有 道氏

○日時 昭和十六年二月十一日午後二時より。
○場所 小石川區茗荷谷町於拓殖大學講堂

東亞醫學協會

東醫文化顯彰

永山昇純

(一)

東醫文化とは、日本神代醫學、支那醫學、佛教醫學の三大門である。従来の見解より擴大された意義を包蔵することになるのである。現在吾人の唱ふる漢方醫學、韓方醫學は、勿論全漢醫學でも満足な言ひあらはし方ではない。更に印度佛教醫學を含めたる廣範なる三大門の醫學を東洋醫學會では東醫文化と稱することを強張するものである。吾人は印度醫學の別名として判斷し易く、佛教醫學の名目を採用することに致したいのである。何となれば、印度醫學の全般は、文獻として大日經、四吠陀論著婆經、因緣經、四分律、昆奈雜事等の佛典中に保存されてあるからである。佛典中の醫學は本草醫法、衛生等に關する文獻が豊富に現存するのみならず、其醫理の深遠にして現代醫學人の補足的な要求に相應する處頗る甚大にして一驚を喫するのである。大佛典醫學は支那の神農醫學と融通する處あるのみならず、日本の醫祖大國主大神少名彦名之神の神代醫學にも昭應する處があるを察知して、歎嘆して止まざるものがある。

西醫文化即ち西洋醫學の唯物的學理の特異性は容認するが、西洋文化を無上醫學として讚美するは頗る危険を感じるものである。西洋醫學で人の生命の正觀を保有せず單に人の外表のみにとらわれてゐることを人生の汚濁するものとして恐怖するものである。この危險の恐怖より救ひ出さんとして、

人生を内觀して頗る深遠なる醫理を包蔵する東醫文化即ち日本支那の三大醫學術理の顯彰のため、大正六年四月南拜山翁を總裁として、東洋保險協會を創設し、其機關誌保健道を月刊し、昭和二年十一月に、大革新を加へ、東洋醫道會と改稱し、機關誌皇漢醫學を月刊して、皇紀二千六百年には第百五十一號を重ねて今日に至つてあるのであります。本會の二十有餘年間の苦心慘澹の困難をいとわさるゝ以所は茲にあるのであります。

東醫文化の三門の事理を顯彰することを天與の使命とを覺悟しつゝ、吾人同志保健的國體運動を始めて以來二十有餘年間は、主として支那の神農醫學を提唱して來たが、神武天皇神代紀元二千六百年祭典の本年からは、東醫文化の三大門中未だ唯一人にも計畫されざり、日本生命長養法を探索して、其現代性を把握し、且つ活用致したる、現代日本人が擧つて惱みつつある保健的困難を退治する大助となることを考慮して、日本天孫醫學と申す一つの團體を結成することになつたのであります。回顧すれば明治維新の古かた、日本醫學界多くは日本の古代には、哲學宗教道學醫學の如き現代人の所謂文化なしと揚言し來つたのであるが、これらの暴言者に反對して今日に至つて居ますが、頗る感快に堪へざることは近時に至つて、日本の神代文化の聲が世界的に高まりつつある事實は、世界古代の天皇を肇め給ふた聰明慧智の皇祖皇宗の

大御國に文化の發達なき筈はなかるべしと斷言してもよい。元皇第五十一代平城天皇神代紀元千四百六十八年大同三年の御發令になつた、詔は正しく、日本國有の醫道の在存を公證し給ふたものである。此の御代に「異邦ノ醫書ヲ以テ本方トナシテ許サズ、先ヅ本邦ノ醫ヲ考慮シテ而シテ後異邦ノ書ヲ安部員眞等に依つて、百卷の大同類聚方と申す本邦醫書の完成を告ぐるに至つたのである。吾人同志が、平城天皇の詔書を奉體して、神武天皇神代紀元二千六百年紀念事業の一として團體を結成するに至つた所以も茲にある。道は形而上術は形而下方に偏するなれ、兩方一見して完全なれ。心といひ、物といひ、體といひ、肉といひ、みなこれ相生相對相關のものにして、或學者は強いて之を分離論をやるくせがあるが事實としては不可能にぞくせざる。この處一段の工夫を要す。火ありても火がものにつかざれば光も熱もあらわさぬやう、物も靈をやどさねば、冷灰にひとときやうに、靈も物によらねば妙用をあらはすに由なかるべし。

この邊の消息を物語ることの出來る人が眞の學者であり、聖者であると思ふ。西洋醫學は唯物一本槍に行き過ぎてゐるから、人間の御用醫術となり得ない。今は全く行きつゝまりはなからふか。人間は心身一如の生命體である。連綿してある東洋醫道に反つて現代性なり、將來性が多分にあるではなからふか。

皇國日本には、大國主大神、少名彦名神を醫祖としたる日本醫道があつたとしてあてであるが、この神以前にも、第十日の祭神として藥師神社に、天體骸長壽主命、萬國五色人大祖振神、天人長壽主命、天日骨骸師彥命、天人長壽生神、天日體骸藥師主命、天日體骸藥師神命、宇麻志何備比古遲天皇、皇子六十九柱、小彥名命、大國主命、天地地祇神八百萬神の十五神が藥師の神と祭られてある支那國民は伏羲神農を開祖として發展したる醫學を中醫と稱し、西洋に起つたる醫學を西醫と常に呼んで居る。今より千三百三十八年前人皇第三十三代推古天皇神代紀元二千二百六十二年聖德太子攝政の朝に百濟より中醫傳來し、日本醫學界に新方面の開拓が出来たので日支兩國は稍々同系の醫學法を保つて來つたといつてもよい。而して日支兩國の保持せし醫道も完全な靈性を包蔵するものにあらずれども、忠實に學び忠實に活用せば現代の日支兩國國民の要する保健的幸福増進の資元となるに足る。現代性に見足るものであるが、如何に日本國家として、名譽學士何にも明治時代の、政治家及西洋醫學萬能主義の醫人等に依つて、吾人の所謂東洋醫道は日本の國法上禁制の死文獻醫學としてのみ存在して居ることになつてゐる。今尙ほ日本政府は明治時代の誤りたる保健的國策を繼續して、朝鮮臺灣の新附の大衆の要望をも斷然之

は、神性の心が清ければ、物の身も亦清く且つつくしくある。これに反して心が邪惡なれば、身もまた邪にして且つ醜なりと、味ふべき醫道ではなからふか。(昭和十五年十二月三日)

之は單に醫學のみではなく、現代の人の教育も、人の宗教も、人の政治も、人の哲學も、人の藝術も、人の道徳も、この邊の徹底大悟がないやうな、うすぐらゝ心地がするのを常に痛恨してゐる。我が醫道の素門靈樞と申す書中に

れを退けて、明治制定の錯誤保健國策を續行して居るのであるから今後五十年を待たずして、日本の國法上には全く東洋醫道は滅亡するの結果となる。然るに今回の日支事變により日本當局も日本國民も、支那國民も保育しつゝある中醫學及び中醫家を決定せねばならぬ。新事態に直面してある吾人は、過失を改むるに憚ることなかれとの古聖者の教戒を謹守して斷然東醫文化破壊の暴行を絶対に中止し、今後は中醫學中醫人を擁護して、同人等も擧つて東洋永遠平和の建設聖業に彼等を協同せしむるやうに誘導するが、日本國家の文化的公務にあらざるか。東亞大陸に於ては現に漢方醫學が行はれてゐる。世人の多くは現在の漢方醫學と自稱する者を見て、漢方醫學を論ぜらるるが、之れは恰も東亞大陸に現存せる僧侶を觀て佛教

を云々せるが如きものである。現在の漢方醫學は善導をせねばならぬ其善導に當つて漢方醫學に就て知る處ある者が、其の局に在らねばならぬ。此の意味に於て、漢方醫學は大に檢討の要がある。今や東亞世界新秩序建設を培ふ、東亞の新醫文化を建てねばならぬ秋である。醫界に於ては、新東洋醫道を以て東亞の民族に臨まねばならぬ。此の新東醫文化建設に當つては、漢方醫學の檢討は是非行はねばならぬ。而して此の新東醫文化建設は早に醫界の人のみにまかすべきでなく、醫界以外の、日本皇國全民一億一心同體となり、之に際與せんことを望む。醫界以外の人には被術者として、時代の趨勢に適應した、仁術を受けるべきである。(元)

(昭和十五年十二月四日龜戸天神祠畔永山誠)

(二) 日本國家の公務

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

の應用

の應用

協會例會講演筆記

は中等、知歯が半ば生えかけて生え切らず歯の周圍に膿をもつて時折腫れる。それも一般的手管にて一時はよくなるが根治せしめるには抜歯する他には方法が無いと云ふ状態でありました。

第三例

四十歳の身體の弱い婦人が上顎の第一大臼歯が割れてゐて、それが時々疼むといふ患者であります。この患者は疼む時に來て手當をして疼まなくなると腹め一年以上も通つてゐるのです。

それに桂枝五物湯を用ひたところ、二、三日経つと限局的に腫れて疼みが遙かに楽になつた。それで限局的に化膿した部分を手術してよくなつた。今は割れてゐる處を結んでゐる。

第四例

私は自宅が田園調布にあつて日曜日にはスポーツや百姓の眞似をしますがその爲に身體がよく疼みそれが三、四日も續く事があります。日曜日の夕方に桂枝五物湯を飲んで置くといふと疼まないう濟みます。

尚子供の内痔病にも桂枝五物湯を用ひてみました。

三人の子供の中二人は五日分にて治りましたが一人は未だ治りません。

第五例

齒槽膿漏に桂枝五物湯を用ひてみました。一ヶ月半服みますと地んでゐた歯がしまつて來ました。その友人が神戸にゐて中耳炎に罹

りアルバジールを飲んで胃が悪くなり、中耳炎が治らないと云ふ患者に桂枝五物湯を與へると十五日分ですつかりよくなりました。

桂枝五物湯は吉益東洞がよく用ひた方劑で桂枝二〇、茯苓二〇、桔梗一〇、黃芩一〇、地黃一〇を一回量として便秘の人には大黃を加へ、炎症の劇しい時は石膏

その頃を懐ふ

竹茹生

K君 この間は御手紙有難。今年の正月はいつもの旅行を思ひ止まつて、その大方を拓大漢方圖書館の整理で暮しました。夕暮れて日足短い冬の陽が、小石川高臺のこの校舎のガラス窓を赤く染める頃、疲れた手を休めて、整理され行く古書の床しい静寂に見入りつゝ、フト君の手紙を糸口、私は今しみと、その頃の追憶に浸り、何かひとりで身の熱くなる思ひがするのです。

もう六年になりますね。昭和十一年二月一日、私達は若い情熱を馳つて、偕行學苑を創し、漢方醫學講習會をこの拓殖大學講堂で開いたのです。あれからももう五年の早霜が流れたのです。その開講の數日前のことでしたわ。あの日は雪のあしたでした。その都の雪を踏んで君は宿舎たる九段の軍人會館から、私のところを訪れ、「鹿兒島のKです」と玄關に立たれたのでした。日本で初めて、名もなき微々たる私共の開いた講習會に、永年築いた故郷の地盤を捨て遙々南のはてなる鹿兒島から上京

された君を迎へて、私達はどんなに感激したことぞう。あの年は何十年來の寒さでした。流行性感冒が猛威を極めておりました。二月一日に開講するといふ二週間前に、聴講申込みは僅かに二人しかなかつたのです。私共のこの頃の勞苦は今も目をとちるとまざく、と險に映じて來ます。學校は全く無償で私達に校舎を貸してくれましたけれども、一夜の講義に燈す電燈料とスチーム代拾圓を超えるのでした。この調子では五人か多くとも十人位の申込みがあるまいと思ふと、一時私共は三月に延期しようか、或は中止しようかと云ふ意見さへ出たのです。その頃のある寒い晩のことです。先生の所から歸つて來た弟が、〇先生との語らひで、三月に延期しやうといふことになつたと告げて來ました。この二人の申込み者の中樞の一人は目下流感で床に就き、恐らく今年の聴講は不可能であらうと云ふ手紙を寄せたといふのです。

K君 その時です。君も確か記憶にあることと思ひます。最初に君が私

を加へます。この方は一名桂枝桔梗湯とも云ひます。主治に上衝咽喉刺痛或は瘡を生ずる者を治すことあり、東洞は牙痛に迫る者を治すこと云ひ南溼は血毒上に迫る者を治す。その證は牙齦疼痛兩頰刺痛或は舌強ばり痛む者を治すと註釋を加へてあります。

の所へ來られた時診察室で一緒に會つたI氏のことをI氏は當時鍼灸家になるべく私のところで勉強してゐました。I氏は優れた精神の持主であり、私は當時からこの人にいろ／＼のことを教へられました。開講延期のことについて私I氏が意見を訊ねると、I氏は形を改め厳然たる口調で申しました。「聴講者が一人もなければ延期するより外はない。たゞの一人でもあれば立派に講義を繼續すべきだ、主人が藥所勘定によつて左右される様では男の價値はない。損をしてもよいではないか、あなた達は醫者ではないか、損したからこれからはよい、働いて皆で出し合ふまでだ。そんなことは今詮議すべきことではない新聞にまで廣告して置き乍ら、既に二人の申込みがあるのに、延期しやうなど云ふ心掛なら初めからやらぬがよい。そんなことでは三月には勿論開けぬ、一生あなた達の道は世に出る機會を失ふであらう」と。

私は弟と共に決然と態度を改めました。さうだ一人でも聴く人があれば開かう、握らうとするな放せ、得やうとするな與へよ、と。

K君 斯うしたときに君が鹿兒島から上京するといふ手紙を受けとつたのです。私共の喜びと堅い奮起の心を想像して頂けるでせう。君の心は百萬の味方でありました。君一人は百人の申込みでありました。君は百人の申込みでありました。私共を感奮させました。私達の心が根底から定まると何といふ不思議な事態の轉換でしたらう。翌々日のことでした。君もいろ／＼世話になつたY先生が御自身から來訪されて、私共を頭山翁の所へ同道紹介してくれました。八方に勢ひが渦を巻いて動いて來ました。私は開講二日前の三十日、十六名の申込書を懐にして、谷中天王寺の先哲醫家の碑前に參詣しました。感

々開講の當日、秋葉神社々司の朗々たる醫祖神祭の祝詞が進められてゐるとき、申込者は續々と教室に満ち、廊下まで溢れ、遂に六十一名に達したのでした。

K君 かくて二月も過ぎ花も漸く散つた。四月半ばの頃でしたらうか、ある日君は悄然として來訪され、郷里に残して來た愛妻の死を語られた。豫て病ひがちの身ながら、もや半歳の遊學中に斯かることもあるまいと、歸郷後の新しい療養方針を樂しみに勉學意なかりしものを、君の老ひたる父君は萬事を引受けられて歸郷せよと勉強せよと打電して寄越したとこのことで君は遙かに愛する妻の冥福を祈ら

K君 君は遙かに愛する妻の冥福を祈ら

K君 日はもうとつぷりと暮れた。淡い感傷に似た返事になつたが、私の心は強く引き緊まるのを覺えます。拓大漢方講習會も今年が第五回です。聖書に、キリストが一片のパンを幾十人の人に分け與へてその腹を充たした、而も籠に何杯か残つたといふことがありますが、それは單なる奇蹟や空想でなく事實であることがおほげながら判る様な氣がします。講座にもこの様な圖書館が出來ました。私は君が今日は一緒に此處へ來て手傳つてゐてくれた様に思へてならない。大原學翁の歌に、別れても心は通へともびとのまことの道のへだてなければといふのがあるといふ。ではまた後便にて、さよなら。

前にして、君は新たな悲しみに胸迫り、ハラ／＼と泣かれた。君の姿を今も目のあたりに見る様です。暫くの語らひで君は別人の様に元氣を取戻して歸られた。然るに何と氣を取戻した君の愛兒は、母の翌月母を失つた君の愛兒は、母の跡を追ふ如く急逝されたといふ報が、悲しみの傷の未だ癒へやらぬ君の許へ届いたといふ。嗚呼。君は上京後一軒の家を借りて弟子と二人で暮してゐられた。今はさうした豫備を持たなくつたので然るべきところへ住み込みたいとの依頼を受けた。私は狭いけれども私のところへと云ふと、君はとも喜んでくれたが、身軀な私の家の混雑さを半日の間見てみた君は自ら思ひ止まつて日本橋の某鍼灸院に移られたのでしたね。

K君 君は遙かに愛する妻の冥福を祈ら

後便にて、さよなら。

◎然るに、こゝには、一つの重大な内憂がある。それは、何を以て、漢方家となすかと云ふ認識が一定せぬ事である。

集る者に、大家あり、中堅あり若輩あり、舊弊家あり、新進あり諄々として漢方の現段階把握を説く者あり(惜むらくは、藥屋落ちなり)見當違ひの「法華經」を持ちこむ者あり、開調の経絡注射専門家なる者あり、古方家あり、後世家あり、今迄群雄割拠して勝手な熱を上げて居た者が、これから仲よく手をつないで、共同動作をしやうと云ふのである。以て今後起るべき困難な問題を想像するに難くない。

◎漢方を醫家團を、現状のまま擴大せんとするならば、甚だ漢方的ならざる分子も拘束せねばならぬ。かくて、濃縮なる漢方家は心中面白くないし、拘束力を小にすれば、頗るさみやかな團體しか出来ぬ。

◎對外的な活動にしろ、漢藥の普及を計るのも、原志項太郎氏式余點も、大きな目で見れば、漢方再興の機縁とも考へられるが、湯本求真氏の如く、漢方は普及させれば、内容が下落すると頑固に考へて居られる老大家も居る。

◎漢方家のかゝる特殊事情を洞察して、緩急自在に、その團結力を發揮せしめ、斯道復興の一大推進力たらしむべく、有力にして敏腕なるリーダーの出現を待望して止まない。

(第三頁より)

人は、結局、自分の爲し得ることだけを爲し得るものである。俗物のみが自己の價值評價を誤つて屋上に竹竿を振つて天空の星群を叩き落さうとするのである。

己れの素質、才能を知つて、一事を爲し遂げる者、その者のみが一事を通じて萬事を爲し得たことになる。(一五・一二・四)

(第二頁より)

さう云ふ場合にどうも効果なくして十味散毒散などが効果の多いものがある。恐らく證がつかぬない爲めであらうが、有持性里などもこれを主張してゐるし、宇津木昆臺でさへ瘍科は外科正宗に倣へと云つて居り、花華流でも外科正宗系統の處方を多く使つてゐる。

藥草國內で自給

大々的に増産計畫

化學藥品の輸入制限、需要の激増につれ製藥會社方面では代用藥品の製造で從來インド、トルコ、南洋、メキシコ、南米方面から輸入してゐた原料不足を補つてゐたが、今同自給自足を計るべく厚生省衛生局では民間に廣く知られてゐる藥用植物の積極的増産と普及計畫を樹て今から實施する。

まづ全國の女學校、小學校、女子青年團、婦人團體を總動員し各自家庭の空地或は學校の實習地の一部に重要藥用植物の栽培を行ひ、生産品は府縣會社が主

る。所謂法を持して方を驅使するといふのであらうか。小林孤雲など古方も努力しやうとしても割切れないものがあつたらしい。臨牀家は兎に角治すといふ合目的性に縛られてゐる。治すことが必須條件で優位だといふ點で必ずしも一つの枠の内に踰越してはゐられない場合があるのだ。

醫療制度改革問題懇談會

去る十二月二十二日午後五時より九段軍人會館に於て、日本醫學研究會並に日本漢方醫學會共同主催の下に、過般厚生省大臣宛提出したる醫療制度改革案中漢方醫學及同療法に對する特別措置に關する請願に就いての経過報告及今後の運動方針に就いての懇談會を開催せり。

當日の懇談會は氣賀林一氏司會者となり、該運動の主旨並に事務報告を爲し、竹山晋一郎氏の進行係に依り、湯本求真氏を初め出席者全員の意見を詳細に開陳討論し將來の實行方針に就て懇談せり。逐て準備委員を選び近く其の發足を見る事になつた。

全國百十數名の請願賛助者に對して案内状を發したが、東京を初め遠く千葉、神奈川、静岡よりの出席者あり、一同隔意無き意見を發表し、此際全日本漢方醫學團の結成を爲す可く意見の一致を見

た。當日の出席者は次の通りである。岩田誠久、伊藤是、馬場和光、堀均、大塚敬節、和田正系、龍野一雄、多々良素、矢數道明、矢數有道、安富正佳、間中喜雄、藤井治郎作、小出壽、湯本求真、湯本一雄、三上平太、日高弘の諸氏であつた。

拓殖大學漢方醫學講座

本年度講座教材及講師

漢方處方學講義 大塚 敬節

漢方處方學講義 矢數道 明

漢方治療各論 矢數 有道

漢方醫學總論 龍野 一雄

漢方治療各論 清水藤太郎

支那醫學史 木村 長久

漢方治療各論 柳谷 素靈

漢方藥理學講義 柳谷 素靈

漢方藥學講義 柳谷 素靈

日本醫學史講義 柳谷 素靈

鍼灸治療學講義 柳谷 素靈

日本食養學講義 柳谷 素靈

鍼灸治療各論 柳谷 素靈

民間藥講義 柳谷 素靈

藥草栽培採取講義 柳谷 素靈

講座要項

日期 自昭和十六年四月一日開講、至昭和十六年七月三十一日終講、四ヶ月間毎日(除日曜祭日)、午後六時ヨリ九時迄

場所 東京市小石川區若荷谷町三十二番地

資格 醫師、藥劑師、療術師、藥商、學生、その他一般有志者

授業料 毎月拂拾貳圓也、入學金貳圓也、全額拂込者ハ入學金也申込ト同時ニ納入スルモノトス

入學手續 入學申込書ニ所要事項ヲ記載シ全額ナラバ四拾八圓也毎月拂ヒテラバ四分拾圓也入學金貳圓也別ニプリント代

金拾五圓ヲ付シテ本大學ニ申込マレタシ、聽講證ヲ交付ス、遠隔地ノ者ハ郵送セラルモ妨ス、申込受付ハ三月三十一日迄

東京市小石川區 拓殖大學 電話(86)一三〇〇

若荷谷町三十二番地

大塚(86)六七三〇

拓殖大學

東京醫學同志會皇漢醫學を訊くの會

去る十二月九日、新宿驛前と云わに於て、本年四月卒業すべき東京醫學同志會にては同學の先輩たる小出壽、矢數道明、矢數有道三氏を招き、先づ工藤訓正氏司會者として開會の挨拶をなし、矢數有道氏進行係となつて、第一に漢方醫學に志したる動機に就て、第二に漢方醫學の歴史と診斷治療學の特質、第三、將來の醫學の動向と漢方醫學の意義なる三項目について三氏より、熱心なる説明あり會員の自己紹介と種々の質疑應答をなし、時の過ぐるを忘れて熱意ある有意義の會合をなし、細川喜代治氏の閉會の辭にて十時半散會した當日の出席者は次の如し。

工藤訓正、細川喜代治、伊藤秀三郎、山口鐵彦、白石正清、田中八州雄、小出壽、矢數有道、矢數道明の九氏である。

編輯後記

○今月號は日華醫學交際號として刊行の豫定であつたが、準備がおくれたため、來月號を特輯號としてお目にかけることにした。従つて、蘇州、葉橘泉氏の存濟醫廬治驗記、山東省、張庵庵氏の略談漢醫之玄理、山東省、高其湘氏の中國之醫學落後、錦州市の白依山氏の暑火熱火之別説、山西省の陳世俊氏の說明週身陰陽之區別その他の中國醫學を代表する方々の論文は本號に收載出来なかつた。これ等の玉稿は、それの和訳と共に來月號の誌上を飾ることとなつた。

○昨年は我が醫學界にも色々な問題があつたが、本年は更に大きな盤根錯節が横つてゐる。これを如何に處理するかによつて、我が道の興亡の岐路が定まる。かかる意味に於て竹山氏の論文は我々の吟味を要するところである。